

# どんぐり山行通信 平標山

第64号

2011年6月18日(土)  
曇りのち雨  
参加者 20名

たいらっぴょう山(1983m)



苗場スキー場を過ぎるとほどなく17号線沿いに平標山の看板が現れる。どんより曇った薄暗いブナの森のなかで急な木の階段を登っていく。新緑だけれど明るさはない。花の百名山らしく道々に高山植物が咲いている。可憐なイワハゼ、アジサイに似たガマスミ、白い毛虫のようなミネヤナギ(皆、花博士の受け売り)が咲いている。1時間ほどで大鉄塔に出る。柏崎原発からの送電線だ。放射能をやり過ぎているとぽつぽつと雨が降ってくる。カッパをつけて雨の煙る中を歩む。雨脚が止まらないので、松手山の手前で撤退。ぬかるみの道に戻って、着替えを済まし、今日はバスの中で昼食。いつも天気にも恵まれていたけれど、今日は展望がないから平標の写真を拝借する。たまにはこんな日もあるでしょう。



\*\*\* 本の紹介 \*\*\*

「神々の山嶺 (いただき)」 夢枕獏 集英社 上巻¥760 下巻¥840

1924年ジョージ・マロリーはエベレストの山頂近くで帰らぬ人となる。山岳カメラマン深町はカトマンドウの古道具屋でコダックのポケットカメラを手にする。これはマロリーのカメラではないだろうか。このカメラとフィルムが手に入れば、マロリーが山頂を極めたか否かがわかる。もし登頂していれば、世界の山岳史を変える一大センセーションを起こすだろう(1953年イギリス隊が初登頂となっている)。この謎とカメラをめぐるって実在した日本人の伝説クライマーやシェルパ頭をモデルに話は展開していく。フィナーレではそのクライマーがエベレスト南西壁単独冬季登攀というとても壮挙に挑戦する。深町もこれを追ってカメラを手に氷壁を攀じる。—— ご一読を。(伴記)

